

発行所 日本キリスト教団 なか伝道所
〒231-0026 横浜市中区寿町 3-10-13 金岡ビル 203
Tel. (045) 671-1109
振替 00200 - 1 - 47369 E-Mail: naka-ch@hb.tp1.jp
http://w01.tp1.jp/~ja6694550
発行者 堀江有里 (題字 松橋 順)

宣教方針
① 貧しい人々への福音に共にあずかる。
② 地域の問題に関わる。
③ 諸教会に呼びかけてゆく。
集会 主日礼拝 日曜日 午前10時30分より

「子どもとともに」をふりかえる

30周年記念特集〈「なか伝」を点検する〉第1回

発題 幸前元さん



今年、創立三〇周年を迎えた「なか伝」。この節目の年に「なか伝」の「いま」をとらえ返す『なか伝』を点検する』という取り組みを始めた。今回はその第一回として、「子どもとともに」の時間にあずかる子どもたちの父親でもある幸前元さんの発題を受け、「子どもとともに」を点検してみた。

■子どもの礼拝参加

——「なか伝」では

いま、「なか伝」では、(おとなの)礼拝の後半に、「子どもとともに」の時間がある。うけられ、子どもとおとながともにあずかっている。その次第は、以下の通り。

- 一 イエスの祈り・手話をつけて
- 二 聖書とお話・牧師、信徒が交代で
- 三 こどもさんびか・おとなもいっしょ

四 献金くお祈り(おとなの信徒が担当)

五 平和のあいさつ・手をつなぎ、輪になって手をつなげながら讃美歌を歌う(手をつないだまま) 祝祷くアーメン(つないだ手をぎゅつと強く握り合う人も)

この中で、一「イエスの祈り」では手話が織り込まれ、子どもたちが、「障がい」ということに気づく機会になっていたり、五「平和のあいさつ」も含めて、身体を使った祈りのスタイルをとっており、子どもたちや難しいことには馴染み難い方も分かち合いやすい祈りとなっている。

■あらためて——子どもとは？

「子どもとともに」を点検するにあたり、基本に立ち返って、「子ども」とはどういう存在なのか考えてみよう。

一 「小さくされた者」の最たるもの

紛争や災害の際に真っ先に被害にさらされるのは子どもたち。「小さくされた者」の存在に光をあてる聖書に聞く場に、子どもが不在というのはおかしいのではないか？ その子どもがいなくても、子どもの存在を忘れることのない礼拝でありたい。

二 多様性を確保する重要な構成要素
理解力は乏しいかもしれないけれど、感性は大人と響き合える子どもたち——子どもにもわかってもらおうとする努力や姿勢が、多様性を大切にする道につながるのではないだろうか？

三 未来・希望の象徴

「小さくされた者」や多様性を大切にしようという思いを起こさせてくれる「子ども」という存在。それは、おとなの心を豊かにしてくれる存在であるとともに、未来を生きる存在として、私たちに、よりよい世界や価値を残し、手渡していきたいという未来への責任を感じさせてくれる存在である。

■参加する子どもたち自身は

今回の発題に先立ち、幸前さんは、「子どもとともに」にあずかっている二人の子どもたちに事前インタビューをしていただいていた。それによれば…

◎「イエスの祈り」や平和のあいさつは、「みんなでやって楽しい」ようすが、「平和のあいさつで、手をぎゅつとするのは痛いな」という感想も。

◎手話をもつとやりたい、覚えたい、手話をやる（学ぶ？）時があるといい…という志も聞くことができた。

◎「聖書とお話」は、絵本を読んだり、花を実際に触ったり、子どもたちが考えてみる問いがあったりしたものが記憶・印象に残っているようだ。

◎こどもさんびかについては、一曲だけではなく、もっと歌いたいとのこと。

■「子どもとともに」を点検する

①子どもとともに礼拝にあずかるすばらしさ、②身体を使った祈りのスタイルの良さ併せて、子どもたちからは、③絵本、実物、双方向のお話が心に残る、④「手をぎゅつとするのは痛いな」、⑤「手話をもつとやりたい、覚えたい」、⑥「こどもさんびか、もっと歌いたい」という声も寄せられた。

さらに、⑦「子どもとともに」の時間、子どもたちを「前」に出させるスタイルは、

子どもたちにとって負担になっていないだろうか？ ⑧信徒が交代で「お話」をする長所と短所（信徒にとっては、良い訓練の場になるけれど、交代なので、子どもたちとの深い関係は築きにくい）、⑨「なか伝」の「少子高齢化」の中で、いつまで「子どもとともに」を持つことができるか？

——等を点検・検討できたら、と思う。

■話し合い

— 幸前さんの発題を受けて

発題を受けて、いろいろな意見が交わされた。上の①～⑩に沿って整理してみよう。

①子どもとともに…「礼拝の途中から子どもたちが合流するスタイルは、他の教会でもやっている」（二つの教会の事例紹介あり。いずれも使信（説教）をした牧師が子どもたちへのお話も担当している。）

③お話…「担当する人は、子どもの眼をみて話して欲しい」、「おとなだって、使信の内容がすべて理解できるものでもない。子どもたちには、難しそうでも、聖霊の働きで、子どもたちの心に届くと信じる。」

④「手をぎゅつ」…「一体感を感じて嬉しい時間。『助けられた』という思いになる」、「子どもには、一体感を共有するという意味は理解し難いかもしれない」、「手を

つなぐ」という身体接触に抵抗感がある。あらかじめアナウンスがあるといい」、「私にとっては、輪になってみんなの顔が見える『平和のあいさつ』の時間は幸せな時間」、「手をつなぐ」については、いずれあらためて議論した方がよいのではないか？

⑤手話…「やりたいという子どもたちの志が嬉しい」、「手話に触れる、学ぶ機会が主日のどこかの時間でもとるといい」

⑦「前」に出る…「子どもたちにも抵抗感があるようにも思える」、「恥ずかしがるから…と『後ろ』でやったこともある」、「『前』の方が明るい」

⑧信徒が交代で…「カリキュラムを組んで分級をやっていた時代、担当者をもっていた時代もある」、「大人と子どもの2つのお話があるのには抵抗感がある」、「『子どもたちとの関係の築き』ということができたが、保育とお話をセットにして同一人物がやればいい」、「『保育とお話をセット』は任が重すぎる」、「奉仕を強要するのもよくない」、「『保育とお話をセット』では、あらためて、大人の前でお話…となつて、『子どもたちとの関係』ということでは、不自然でやりにくい」、「保育の時間が、ある意味では教会学校なのではないか？」、「保育の部屋の本などもいれかえて、より楽しめる場にした」、「『子どもとともに』よりも子どもたちが長い時間を過ごす『保育の時間』が今日の問題意識から抜け落ちてしまっていた。」

⑩子どもが一人もいない時…「子どもがいなくても、『お話』はカットせずやるとよいのでは？」、「きょうは、子どもがいなかったが、お話してもらってよかった。」

◎その他…『子どもとともに』の時間だけでなく、『保育の時間』、『愛餐とその前後』など、子どもたちが、来てから帰るまでの時間すべてについて、子どもたちが楽しく過ごせるよう、私たちができることを検討していくといいのではないか、「『なか伝』は、年齢の異なる子どもとも出会い、遊んでもらったり…といった子ども同士が育み合う場にもなってきた。それぞれの子どもたちが楽しく過ごせればいいのでは？」、「子どもたちの名前や、親子、きょうだい関係がよくわからない」、「幼い時に教会に来ていた子どもも、自我に目覚め、教会に來なくなることも多くあるけれど、子どもの魂の根っこに（教会で得たものが）残っていると信じたい」、「これから、何らかの形で『子どもとともに』の持ち方について、改革をしていくとしたら、子どもたちの声を大切にして決めていこう」、「引き続き点検・検討をしていこう」などの意見が出された。

幸前さんからは、子どもたちに「保育の時間」への感想も聞いてみて、また報告したいとお話があった。

（まとめ 江國泰介）

使信

待たれる〈救い主〉

堀江有里

アブラハムの子、ダビデの子、イエス・キリストの系図。

ヤコブはマリアの夫ヨセフをもうけた。このマリアからメシアと呼ばれるイエスがお生まれになった。

こうして、全部合わせると、アブラハムからダビデまで十四代、ダビデからバビロン移住まで十四代、バビロンへ移されてからキリストまで十四代である。

(マタイによる福音書

一章一節、十六〜十七節)

◆イエスはどこからやってきたのか

「聖書を読もうとしたけど最初でつまづいた。なんだか意味がわからん」。キリスト教に関心を持ち、新約聖書を読もうとした経験をもつ人から、そんな声を聞くことがあります。マタイ福音書の冒頭、たくさんの人たちの名前リストが「つまづき」の原因だといいます。

マタイにはイエスに至る道筋が、ルカ(三・二三〜三八)にはイエスからさかのぼる道筋が描かれています。整合性はありませんが、イエスの言葉や行ないを伝え聞き、継承していこうとした人たちが「イエスはキリストであ

る」と権威づけるために、ヘブル語聖書(ユダヤ教の経典「旧約聖書」)から重要だと思われる人物の名前を引用し、書き連ねているという点で共通しています。この人こそが待ち望まれた救い主なのである——何よりもそのよ

◆「系図」が示すもの

そろそろ原稿を書きはじめなければと思っていた矢先、常子さんの訃報が届いた。心は動揺し、なか伝に集う皆がそうだろうが、何しろ動揺している。

英俊さんと常子さんは頭の中でセットでパターン化されている。その片割れが突然、神様の御心のゆえだとしても、私たちのもともからいなくなってしまう。

英俊さんのつらさはいかばかりかと思えばつらいし、英俊さんを残して先に旅立ってしまった常子さんの辛さもいかにばかりかと思えばまたつらい。

常子さんにはもはや会えない。もはや私たちは記憶に残る常子さんの残像に触れるばかりだ。しかし残像に触れることによつて、常子さんはしばしよみがえり、私たちは常子さんのその温かさに触れることさえできるかもしれない。

常子さんは遅刻の大名人の私を日頃か

わたしたちはこの箇所からどのようなメッセージを読み取ることができのでしょうか。権威づけされた、つまり、イエスがキリストへと変えられていった痕跡を批判的に考える以外に、です。

この名前リストのおもしろさのひとつは「ほころび」が生じている点です。そこに連なっているのは少なくとも血縁関係ではない。とくに最後の部分には「ヤコブはマリアの夫ヨセフをもうけた。このマリアからメシアと呼ばれるイエスがお生まれになった」

ら気にかけていて「遅れないで来なさいね」と促されることもしばしば。しかし遅刻の大名人がそんなに簡単に直るものでもなく、ある時からは「だめだこりゃ」モードも入ったと思います。でもいつもより少しでも早く礼拝に参加すれば、最も喜んでくれていたのは常子さん！

コニコとした顔が浮かびます。野外礼拝の日、いつものようにお昼頃なかに伝に到着。あらら、常子さんが一人。

常子さんは私のような者のために、なか伝で留守番をしてくれていたのです。お昼におにぎりを分けてもらい、ちよつとした、たわいのない幸せを感じて一時を二人で過ごしました。

一事が万事遅刻モードが濃い生活。常子さん、天国から今もわたしの遅刻モードに関心を寄せているかもと、勝手に想像する私なのであります。

(By Ume)

エー・エ

(家族で箱根に小旅行へ出かける朝のひとコマ)

友「ねえねえ、これかみ鎌倉に行くんでしょっ?」

(気分はいつも「いざ鎌倉!」 友8歳)

(十六節)とあります。ヨセフはイエスの生物学的な父ではありません。マリアはヨセフと関係をもつ前に、イエスを産んだのですから。つまり、イエスはわたしたちの救い主なのだ、と主張する、この名前リスト自体が、血縁関係の「へほころび」をも示しているのです。

しかし興味深いことに、後の教会は、血縁関係やそのメタファーである「家族」を重要視していくこととなります。わたしたちもその「家族主義」から自

由ではありません。そのようなわたしたちに対して、血縁関係をもとにした「家族主義」を根本から突き崩してしまうのが、このマタイ福音書の冒頭に描き出されている名前リストでもあるのではないのでしょうか。

◆「いま—ここ」で問われること

待降節(アドベント)を迎えた教会では丁寧なリースとクラッツの準備が進められ、一週ずつ、ろうそくに火を

まど

▼なか伝の支柱のおひとりでもあった渡辺常子さん(渡辺英俊牧師のお連れ合い)が十一月十六日に逝去されました。享年八四歳でした。謹んで哀悼申し上げます。十九日の主日午後、伝道所の仲間たち二名とお別れに寄せていただきました。告別式(二一日)は常子さん

のご遺志によりご家族・ご親族のみで渡辺英俊牧師の司式でとりおこなわれました。教会でも記念会を開催できたらと考え始めているところです。決まり次第、ご案内申し上げます。

▼一〇月二日には三〇周年記念礼拝と午後には感謝茶話会を開催することができました。来賓の方々も七名ご参加くださり、出席者は三九名。創立時メンバー

である小笠原敦輔さんの司会、横浜磯子教会の現牧師である中村清先生にも正面に並んでいただき、英俊さんの感謝の言葉で締められた感謝会。三〇年間のあゆ

みを振り返り、創立時の思い出話にも花が咲きました。なか伝にとつて、英俊さん、常子さんへの感謝をわかちあうことのできた大切な時間でした。

▼三〇周年誌も教会メンバーの並々ならぬご奉仕のなかでできあがり、みなさまにお届けする運びとなりました。お支えとお祈りに心より感謝です!

▼寿地区での炊き出し、報告集作成準備、越冬闘争に向けての行政交渉、映画会：いずれも中途半端に顔を出させていただいています。知れば知るほど「知らなかった」ことに気づかされる不思議な

まち。同時に、生活保護申請同行の窓口や行政交渉のテーブルの向こう側に懐かしい姿をみかけることもあります。中学校の同級生や諸活動で出会ってきた友人たち。横浜に来たのだなあという実感。自分の位置を問われる瞬間です。

(堀江有里)

ともしながらイエス・キリストの誕生という「喜ばしき出来事」へとあゆみを進めていきます。

他方で、教会の外、寿のまちでは「第44次越冬闘争」の準備が進められています。いのちを守るたたかいが44年もつづいていっているのです。実行委員会の人たちは、野宿者や寿のまちに暮らす人びと、現代日本の貧困や格差の状況を踏まえて、一四〇項目ほどの要求をたずさえて神奈川県や横浜市と交渉を重ねます。

「黙って野たれ死ぬな。生きて奴らにやり返せ」——寿だけではなく、東京の山谷、大阪の釜ヶ崎でも同じスローガンが掲げられ、越冬闘争は行なわれていきます。統計上、このまちには圧倒的に単身者の男性が多い。教会が「家族」から自由になれないことと対照的なような気がします。

ある日の炊き出しで、訃報を知りました。炊き出し作業に参加していたメンバーが路上で亡くなったという訃報でした。顔の見える大事な存在が、ひとりで亡くなっていったことに、この数日間、思いを馳せています。

マタイが描き出そうとした系図の、血縁関係の「へほころび」が、このまちなかで何かを示唆してくれているのではないかと、いま、わたしは考えています。

「クリスマス献金をお願い」

今年もまたクリスマスを迎えます。毎週語り合える礼拝の席にはイエス様が共にいて、神の言葉に心を開かせてくれます。誰にでも開かれた礼拝であることを常に忘れないように……。昨今の経済状況などから本心に心苦しいのですが、今年もクリスマス献金をお願いいたします。昨年は三七五、九〇〇円のご支援をいただきました。皆様のご支援、ご協力を感じます。今年もどうぞよろしくお願ひ申し上げます。

編集後記

ふだん、さりげなく行なわれている礼拝のなかの事柄も、いろんな人たちの思いがたくさん詰まり、それぞれの受け取り方がある。それを分かち合える学習会は、なか伝の仲間たちにとって、大事な時間です。(YH)